

20 眼科研修プログラムの概要

1. プログラムの目的と特徴

卒後初期研修の到達目標達成後、眼科専攻医としての研修を行う。このレジデントプログラムを修了することにより眼科一般医として眼科領域の疾患の診断、治療に責任をもって対処できる知識と技量を有し、チーム医療の一員として相互監査と客観的な自己評価による医療の質の向上に努力し、臨床医としての倫理観の確立を目標とする。

また、3年の間に眼科医療に関する知識と技能を深め、眼科専門医として自立できるよう、日本眼科学会専門医制度「眼科研修医ガイドライン」に則った十分な研修が実施されることを目標とする。

当病院には救命救急センター、総合周産期母子医療センターが併設されているので、この分野での研修も併せ実施できる特徴がある。

2. 研修内容と到達目標

当科の指導医は現在4名、視能訓練士5名、外来患者数は一日平均で約100名、入院病床は14床、年間手術件数は約800件

1年目

- ① 外来においては、屈折検査、視力矯正検査、細隙灯顕微鏡検査、眼圧検査、眼底検査などの基本的眼科検査を修得後、蛍光眼底撮影、超音波検査その他、種々の眼科精密検査を修得する。静的（動的）量的視野検査なども視能訓練士に任せきりにせず、自ら実施研修する。
- ② 入院では指導医と共に患者を受け持ち、患者やその家族との関りチーム医療のあり方などを学習する。
- ③ 基本的眼科治療技術について、指導医の指導の下に積極的に研修する。
- ④ 指導医の手術助手を十分務め、基本的手技や手術理論を修得したのち、外眼部手術を指導医の指導のもとで執刀する。
- ⑤ 救急患者の手術には、夜間も含め積極的に助手として参加する。

2年目

- ① 各種光凝固術を指導医の確認を受けながら開始する。
- ② 外眼手術の他、指導医のもとに白内障手術を部分的に執刀開始
- ③ 後期は難度の低い症例を選び、指導医の指導のもとに執刀
- ④ 外傷手術（夜間も含め）も簡単なものは指導医の指導の下で執刀

3年目

- ① 緑内障や裂孔原性網膜剥離手術なども症例を選び、難度の低いものを指導医のもとで執刀
- ② 新生児医療センターにおける未熟児の眼底検査を研修